第３９回みんなのタウンミーティング会議報告

１　開催日時　令和８年３月２４日（火）　　午後７時００分～８時３０分
２　開催場所　オンライン
３　参加者　　市長及び市民２名
４　会議次第　　⑴　開会
　　⑵　市長あいさつ　（市政報告）
　　⑶　懇談（フリーテーマ）
　　⑷　閉会
５　懇談内容要旨

	件名	ご意見・ご要望等	市長からの回答等
1	文化財センターの椅子の設置について	文化財センターは土足で上がれないため、靴の脱ぎ履きをしなくてはならないのですが、椅子がなくて困っています。	椅子を置けるように言っておきます。
2	文化財センターのＡＥＤの設置場所について	文化財センターに設置されているＡＥＤ（自動体外式除細動器）は柵の中にあるため、文化財センター閉館している時は使用できず、使えない状態の時間帯のほうが圧倒的に長くなります。ＡＥＤはそもそも緊急時に使用するものですから、柵の中に設置すること自体がおかしいことだと感じます。	ご意見として受け止めさせていただきます。
3	文化財センター職員の喫煙について	文化財センターは外で喫煙してはならないはずなのに、吸っている職員がいます。	二度とそのようなことがないように言っておきます。
4	公民館の位置づけについて	公民館は、行政の中でどのように位置づけられているのでしょうか。 税金を使って、わざわざ公民館でやらなくても良いのではないかという講座が多々見受けられ、カルチャーセンターのようになっています。 漏れ聞こえてくるところによると、委託を受けているＮＰＯ法人は本館から「集客」という強いプレッシャーを受けているということです。緑分館でも、それは本当に緑町に必要なのかと思うような講座が開かれることがあります。集客が公民館の業績を評価･管理するための指標になるのか、集客しないと契約終了するというプレッシャーがあるのか、公民館はそればかり気にしているような気がします。 今、公民館で実施しているのは、その場で受けて終わる講座ばかりです。そこに集まった人達が講座を通して地域で繋がり、地域で活動するサークルやボランティア団体といったものを生み出すというのが、公民館本来の役割であって、人を繋げていくという意識が今の公民館は希薄だという認識を持っています。イベント事で多くの人が集まってくるのはとてもよいのですが、その後の計画がなされていないのではないかと思います。	公民館は社会教育施設ですので、カルチャーセンター化することを教育委員会として狙っているわけではないということだけは、明確に申し上げておきたいと思います。 本館からプレッシャーが来ているという話を私は聞いていませんので、それについてはすみませんがお答えできません。 公民館の使用に当たっては、使用料を徴収するという条例が昨日の市議会定例会で可決されました。社会教育団体は無料、それ以外の登録団体は一部免除、さらにそれ以外、民間でお金を取って教室を運営しているような、公民館本来の使い方ではない方からは、使用料はきちんと払ってもらうという整理をしたところです。 公民館の位置づけや、小金井市として、教育委員会として公民館をどう考えているのかといった議論もある中で、公民館はやはり地域の学びの場であり、そこで人材を育成するという考え方はしっかりと持っています。ただしそれだけではなく、多くの方の生涯学習も含めた多様な学びの場であり、交流やつながりを創出するという役割もありますので、多様な講座というものはあるだろうと認識しています。
5	公民館の役割について	小金井市は生涯学習という人を育てていく力、公民館のようなところに地域の人たちが集まって、地域の課題に立ち向かうことを促す力がとても弱いと思います。 ＰＴＡや自治会もそうですが、やはりやる人たちが固定化してしまっているというのが、小金井市の課題だと思っています。やる人はずっと続けてくださるのですが、そういうところに新しい人を入れていく、人材を供給するというのが、本来の公民館というか社会教育の使命だと思います。そういったところを、ぜひそういう意識で、そういう方向をもっと強く打	地域課題に気づき自分事化するということ、それに対し自分で何かできることを考え、そしてそういう仲間たちが集まって、新たな動きが生まれてくるというのは、一番理想とする形です。町会、自治会の話もありましたが、やる人が固定化しているということは、私が市長になって地域を見た時から危惧していることであり、施政方針を含め地域人材の発掘と育成という言葉を使い、ずっと伝えてきたことです。まずそのためには、地域そのもの、自分というもの、自分と地域そのものの関わりが納得できていないと、地域課題を自分事化できません。そこの働きかけが公民館本来の役割であるというのは、仰るとおりです。

		ち出してほしいです。	教育委員会の案件にはなりますが私も必要だと思っており、今日いただいた御意見も教育長と生涯学習部長にしっかりと伝えておきたいと思います。 私は、ボランティア含め、地域で行われている様々な活動の総和があって、小金井市というまちが機能していると思っています。しかし、欠員や成り手がいないということが続いていくと、やはり同じ人が繰り返し担わざるを得なくなり、活動の幅も広がらず、新しい人も入ってきません。ここをどう動機づけするかということをずっと考えていますが、一つのきっかけとして取り組んでいるのが市報のリニューアルです。全面カラーに加えて紙面のデザインも変え、毎月１５日号は、表紙と最初の見開き合計３ページを特集記事のページとしました。地域課題や活動している人を紹介しながら、具体的に分かりやすく伝えていくのが狙いです。もっといろいろな活動を紹介したいものの、年１２回しかないので苦慮しているところではありますが、例えば、１月１５日号の消防団の特集では、単なる団員募集ではなく、こういう人がこういう活動しているということがよく分かると多くの方からお褒めをいただきました。 恐らく、市としてできることの一つは、地域の実情と課題と、それに動いている人たちがいて、あなたもその１人になれるのだということを、市報だけではなく、いろいろなメディアを通じて、しっかり分かりやすく伝え続けていくということで、それこそが大切だと思っています。
6	地域の人材活用について	ＮＰＯ法人に委託していない公民館の場合、土日はシルバー人材センターから派遣されているということを最近知りました。教えてくれた知人は毎週働いていたそうですが、やりたい人が多くなって、順番待ちになったそうです。シルバー人材センターからお金が支払われていることも一つのポイントなのかもしれませんが、リタイア後で仕事がないもっと高齢の人たちに、いろいろな形でお願いする方法を考えれば、有償ではなくボランティアで引き受けても良いという人もいるのではないでしょうか。そういう人たちをターゲットにすることも一案だと思います。 「協働支援センター」の構想は素晴らしいことだと思いますが、そういうふうに四角四面にしなくても、市民の中には凄い能力や経験を持っている人達が、そこかしこにいますので、その人達に少しでも手を貸していただける流れをつくるために、何をするかというだけのことだと思います。そのときに、一つの切り口として、現役世代を超えたいわゆる高齢者の若手狙いも良いのではないかと思います。 市長が地域人材育成発掘とおっしゃっていますが、第５次生涯学習計画にはイベントの話ばかりで「地域に欲しい担い手」などのことには全く触れておらず、読み取ることはできません。小金井市にはシニアでも現役世代でも、凄いスキルを持った人や、あの会社でこんな技術開発していますというような人がたくさんいます。にも関わらず、生涯学習や社会教育の施策が、何かとてもずれていると感じます。 ベッドタウンの小金井市は昼間の人口が少なく、帰宅後の夜間や土日に消費をしたり休んだりする場所のようになってしまっていますが、「生活している場所なんだから、地域の主役になれるんですよ」という旗の振り方がバージョンアップされておらず、箱物も行事もイベントも３０年前かと見紛うほどです。	仰っていることも課題だとは感じています。リタイアしても、地域に出ていくという関係性がうまく構築されておらず、いつも独りで過ごしているという人は、結構いらっしゃるのではないかと思いますし、そういう人たちは、交流する場や、何かを始めるきっかけなどのところで、一歩踏み出せない現状があるのではないかと思いますので、それをうまく後押しできる仕組みがあったら良いと考えています。 何か自分でやりたいという人が気軽に相談できたり、いろいろな情報を提供することができる場こそが、「協働支援センター」になると考えています。現在は準備室ですが、本格実施に向けて再検討委員会を立ち上げており、そういう場をしっかりつくって、地域人材の育成につなげていくことで、一定程度少し解決する道筋の一つとなる窓口にすることを考えています。

		確かに定量的に測れるものを目標にしていますが、現場でボランティアなどをしている側からみると、その定量には意味があるのか、果たして、ちゃんと人が育っているのだろうかと思います。やっている人がずっと変わらず、他にもたくさんの人がいるのに入ってこられないのは、そういったプランのたて方が下手だからです。	
7	職員の地域参加について	職員はもっと地域に出てくるべきです。私は近隣市にいろいろと話を伺いに行ったりしますが、たいていボランティアなどをしている地域の人がいて、校長先生がいて、その後ろには「市をこういうふうにしていきたいから、何かあったら言ってください」という行政の人がちゃんといます。 小金井市の職員は、地域に出てきても何かを読んでいるだけで、「あなたはどう思いますか」と尋ねると、「それは私が答えるべきことではありません」という答えが返ってきます。 私達は消費者ではなく協働者です。子どもが育つ地域は豊かで明るい場所であってほしいと願っていますので、その願いと合致することを、地域にいる私達と行政として権限を持っている人達が協力し合って進めていければと思っています。 昔、新潟で地震があったときに、行政が箱物をたくさん用意したものの、地域住民は全く喜んでおらず、ある職員が何度も足を運んでようやく本音が聞けたそうです。そういう取組が、小金井市の職員からは見えてこず、何か意見を言っても、聞いておきます、でも結論はこれです、ということがとても多いので、そういったところの壁を打ち破っていただけたら、私達は現場でいくらでも協力しますと、ぜひお伝えいただきたいです。	私自身、就任してからずっと職員にもっと地域に出るようにと言っていますが、おそらく経験がないと、言われてもよく分からないと思います。 地域に出ることによって、人脈やその地域で知ったことというのは、絶対に活きてきますし、地域を知らずに地域課題は解決できないと思います。私自身、地域に出ることで活かされていることや、改善するきっかけになることなどがたくさんあります。 課題解決のようなことが何十年と話題になってきましたが、今一番大切なのは、問題発見と言われています。どこに問題があるのか、その問題がしっかり発見できないと、課題設定を間違うし、解決策も間違ってしまうということです。まず問題を発見するためにも、地域をよく知っているということは大事なことだと思います。 職員の地域活動への参加を推奨していくことが、地域の課題解決や職員の資質向上につながり、ひいては職員そのものの仕事のやりがいや、仕事だけではない人生の生きがいにもつながるとして、それを推奨していこうという「地域に飛び出す公務員を応援する首長連合」というものがあります。小金井市では、既に地域ボランティアを推奨しており、またそういうメニューもつくって全職員に案内しているところですが、さらに令和８年度はそこに加盟し、職員の地域活動への参加を促していこうと考えています。
8	市民の主権について	市民は行政に対して消費者のスタンスですが、主権者ですし、主権があるということは自分たちで民主主義を行使する権利もあるはずです。小金井市には、これだけ知識のある人たちが住んでいるのだから、行政に指示されるのではなく「それは地域で決めます」ということができるのではないかと思います。ただ、そこに至る道のりはまだとても遠いのだと思っています。私が任されているコミュニティ・スクールについては、皆さんに御協力いただきながら、地域に関する主体性といったものを少しでも持っていただけると良いと思っていますので、ぜひ行政からもバックアップをしていただけたらと思います。	社会全体がそうなってきてしまっているという感じはどうしても拭えませんが、それが良いとは思っていません。自分たちに主権がありますので、主体性を失ういわゆる「お客さん化」しているということは問題だと思っています。
9	教育委員会と市長部局の関係性について	学校と学童保育所が全然交わろうとしないのは、なぜですか。現場にいる職員まで、質問しても、それは市長部局なのでとか、こちらは教育長部局なのでと言っています。 大人の事情がどうであれ、子どもにとっては、学校の教師も学童の指導員も同じように「先生」です。「学童保育のこの時間はここへ行ってはいけない」といった、つまらない大人の事情で決められている様々なことについて、これは子どものためになってないのではないかという捉え方ができる視点は持っていただきたいです。 それから、さきほど「こどもまんなか」という言葉がありましたが、あれはおそらく社会教育の世界から出てきた言葉です。あの言葉には続きがあり、「子どもを真ん中に、周りの大人の関係を整える」となるんです。社	いわゆる縦割りと言われますが、程度の差はあれ、学校との協議が難しいという話は、ほかの自治体の首長からも聞いたりしますので、小金井市だけに限ったことではありません。 教育委員会も学校も学童も、全てが同じ市内にはありますが、教育委員会は教育委員会という枠組みの中で物事を決定しており、学校はさらにその中にあります。学校の第一義は子ども達のための教育施設であり、施設の管理者は責任が伴うため校長の権限を明確にしておく必要があることから、一概に縦割りだから良くないというわけではありません。ただ、市があって、教育委員会があって、その中に学校があるという３層構造になっているということで、お互いが納得できる合意点への壁が、他よりも少し厚いと感じられるのかもしれません。 教育委員会との関係性だけではなく、市長部局の部署間でも、同じような状況はあり

		会教育士という社会教育と生涯学習の推進者としては、「子どもを真ん中に、周りの大人の関係を整える」のが私たちの使命なのです。 　子どもを真ん中に置けば良いわけではなく、大人が「学童が」「学校が」など言わず一緒に関係を整えていこうということですので、大人の関係を整えることも必要です。	ます。それぞれマンパワーが限られている中で今の仕事を抱えているため、調整が難しいということもありますが、私としても、一般的に縦割りと言われるものをもう少し薄くしていきたいと思っています。ですから、学童の大規模化問題について、やり方など、いろいろと変更してやっていこうと、新年度に向けて話し合っているところです。 　「こども真ん中」というのは、内閣府が「こどもまんなか社会」と言っているから、それをそのまま使っているということではありますが、いま教えていただいたことが、まさに本質だと思っています。
10	申し込みの受付方法について	市報に様々な募集記事が掲載されていますが、いまだに申し込み方法が電話しかないことがあります。しかし、聴覚障害で電話ができない人もいます。また、Ｅメールであれば、夜中に申し込むことができますが、電話の場合は、時間や休日などで制限があります。 　例えば市報でいろいろ情報発信をしても、市報を「見ていない」人がいます。「見ていない」というのは、見る気持ちはあるのに見ることができない人がいるということです。 　すべてが健常者目線になっているということがまだまだあり、健常者じゃない方たちは申し込みができないということに繋がります。 　そういうことを何年も前に投げかけてかなり変わりましたが、変わっていないところがあります。それがよく目立つのは健康課です。 　市民の側の立場に立って物事を進めるのは、行政に関わる方の仕事の原点だと思います。	気づかないうちに、健常者目線で全てが設計されてしまっているとは思いますので、多様な環境の方、状況の方がいらっしゃることを踏まえるように、改めて健康課には注意しておきます。